

倉島繁教授を送る

著者	梶浦 善次
雑誌名	北海道女子短期大学研究紀要
巻	13
ページ	11-12
発行年	1980
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00001930/

倉島繁教授を送る

学 長 梶 浦 善 次

倉島繁教授は、本学には昭和49年4月より勤務され、6カ年間教壇に立たれて、今春一応の退官をされることになった。同教授は、初等教育学科の教材研究・体育、保健体育科の保健体育教科教育法及び教職志望者全体に対する教育実習を担当された。「はしがき」でも書いたように、愛好の体育クラブにも若い時に変わらない情熱をもって指導に当たられ、その教育的熱意には頭をさげずにはいらなかったのである。

短大における同僚としての期間は長くはないが、私が同氏を知ったのは、昭和5年のことであり、50年も昔のことであった。私は東京高師を卒業すると同時に、北海道庁立札幌第一中学校の教壇に立ったが、倉島氏は、昭和4年札幌師範学校を卒業されて、現札幌市立円山小学校の前身である藻岩村立円山尋常高等小学校の訓導であった。私は、同じ円山尋常高等小学校の訓導であった私の親友のひとり市田守一君を通じて倉島氏を知ったのであった。当時、氏は新進気鋭の若い訓導であり、また陸上競技やバスケット・ボールに秀でたスポーツマンとしても活躍されていた。

その後私は小樽に去り、戦時中東京に出て、氏との交渉も断たれたが、昭和19年秋、私が北海道第一師範学校に赴任することになったことから、また同氏との交渉が再開されたのである。氏は早く附属小学校に転勤され、当時はその教頭として教生指導や附属校の運営に当たられていた。その理論的造詣と教育的剛直さで、知られていた。氏は昭和7年から24年まで17年という長い附属小中学校訓導を辞して、新制の豊平町立（現札幌市立）石山中学校校長となり、昭和28年には江別町立第三中学校校長となった。当時まだ戦後の余波が収まらず、教員組合の要求と氏の教育信念が対立することもあり、そのことが影響してか、32年4月には当別町立西当別中学校校長として移られた。氏を知る人は、これを不当な人事として憤慨したものであった。しかし、氏の教育的識見と教育信念の剛直さは人びとの認めるところであり、34年7月江別市教育委員会教育長として抜擢され、ここに3期12年の長きにわたって、躍進する江別市の名教育長として、教育の向上充実に活躍されたのである。

本学関係としては、姉妹関係にある第二大麻幼稚園長としてその開設運営に当たられ、その後短大専任教授となられたことはすでに記した。本学では、師範学校附属小中学校の教頭としての長い経験を背景に、教育実習及び体育科教育法などを担当されたが、実は氏は万能の人であって、国語研究者としても音楽教育の実践家としても第一流の人であり、行くところ可ならざるはないといった才能の持主である。広い一般的な教養と広い教育的識見は、氏をユニークな存在としているのである。

江別市に開設された本学に対しては、教育長として格別の便宜をはかれ、また実際に学生指導に当たられた深いご貢献に対して深い感謝の念を表わし、かつ先生の今後の一層のご自愛

を祈って、回想の文章とする。

学歴及び職歴（略歴）

- 昭和4年3月 北海道札幌師範学校本科第1部卒業
- 昭和4年3月 北海道札幌郡藻岩村立円山尋常高等小学校訓導兼札幌師範学校訓導
- 昭和7年4月 北海道札幌師範学校訓導
- 昭和24年4月 札幌郡豊平町立石山中学校長
- 昭和28年11月 札幌郡江別町立江別第三中学校長
- 昭和32年4月 石狩郡当別町立西当別中学校長
- 昭和34年7月 江別市教育委員会教育長
- 昭和49年4月 北海道女子短期大学教授兼第2大麻幼稚園長
- 昭和51年4月 兼務を解く
- 昭和55年3月 北海道女子短期大学退職
- 昭和55年4月 北海道女子短期大学教授嘱託